平成 26 年度陸前高田市文化遺産調査団実施報告書

次世代教員養成センター　中澤静男

１．目的

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約 1 割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、本調査団を派遣する。併せて被災地の状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地に学ぶ防災教育を開発する。

２．実施月日　　平成 26 年 9 月 9 日（火）～　12 日（金）　3 泊 4 日

３．参加者

教員　　：加藤久雄、山岸公基、中澤静男
大学院生　　：沼田萌生（美術教育専修M1）
教職大学院生　：島俊彦（M2）、竹田隼也（M2）
学部生　　：横井まどか（文化財造形専修 4 回生）

４．主な日程

9 月 9 日（火）

09：30　仙台空港着
10：30　熊野本宮社（名取市）・那智神社見学
13：30　大木囲貝塚・七ヶ浜町歴史資料館見学
14：15　湊浜薬師堂　七ヶ浜町湊浜薬師見学
17：30　陸前高田市：宿泊所着
19：30　気仙沼市立小中学校教員に避難所における教員の役割について聞き取り調査

9 月 10 日（水）

09：00　陸前高田市教育委員会、山田教育長表敬訪問
10：00　正覚寺にて、被災した浄土寺の仏像を調査
13：00　仏像調査班：正覚寺での調査の継続
　　防災教育班：米崎中学校仮設住宅集会所で大津波被害者への聞き取り調査
16：00　高田市長部コミュニティセンターで、避難時の消防団の活動についての聞き取り調査
17：30　及川氏宅を訪問し、漁業の復興、市街地の復興について聞き取り調査
21：30　宿泊所着

9 月 11 日（木）

09:00　黒崎神社（東岸寺）で懸仏の調査
　　防災教育班：市街の被災・復興状況視察、高田松原を守る会の松の育苗施設見学
14：00　常膳寺で文化遺産調査
　　中吉丸乗組員の子孫である上野文雄氏への聞き取り調査
　　坂上田村麻呂に討たれた早虎の隠れ家と伝えられている岩場の調査

17：30　　宿泊所着

9 月 12 日（金）

10：30　　三輪神社大師堂（平泉町長島）見学

11：30　　柳之御所遺跡・柳之御所資料館見学

13：30　　中尊寺見学

15：00　　毛越寺・観自在王院跡見学

17：45　　仙台空港着

５．調査活動について

（１）はじめに

2012 年度から始めた本調査団も第４次となる。第１次・２次は小友町常膳寺の仏像調査を行い、本尊である十一面観音菩薩立像や千手観音立像の調査を行った他、阿弥陀仏坐像の頭部内面に墨書を発見することができたり、薬師如来立像と幕末に発生した中吉丸漂流事件のつながりを見い出したりなど、多大な成果を収めることができた。第３次調査においては、住田町向堂観音堂での十一面観音菩薩坐像の台座裏面から墨書を発見した他、頭頂仏の形態から円仁との関係を見い出すこともできた。これら仏像調査の成果として、子ども用教材を作成し、陸前高田市教育委員会等に寄贈している。また、第１次調査から継続して、陸前高田市の被災・復興状況、特に高田松原の復興について見学・聞き取り調査を行い、防災教育についての報告書や指導案を作成している。

今回の主たる仏像調査の対象は大津波で被災した東岸寺（黒崎神社）の懸仏であった。この懸仏を選択した理由は、これまでに調査を行った常膳寺十一面観音菩薩立像と千手観音菩薩立像に共通するブレスレットの形態とこの懸仏を縁取る彫刻の形態に類似点があり、作者が同一人物あるいは同一工房である可能性が指摘できるからである。

また、防災教育においては、今回初めて仮設住宅にお住いの方々へ聞き取り調査を行い、避難時の様子やその後の避難所生活での小中学生の働き、また仮設住宅での現状といった、なかなか聞くことのできない実際を見聞し、防災教育の研究を行うことが主たる目的であった。

（２）市街地の復興について

今回、陸前高田市に到着してまず目についたのが、巨大なベルトコンベアーであった。奇跡の一本松にほど近い、高田バイパスと国道 340 号線の交差点を中心に、山上から土砂を運ぶコンベアーが林立している。

陸前高田市では、大半の市街地の海抜が低く、大津波の被害が大きかったことから、ハード面の防災対策として２つの工事が進められている。一つは防潮堤の再構築である。もう一つが市街地の造成である。

奇跡の一本松とベルトコンベアー

昭和時代の津波被害の経験から、陸前高田市では高さ 6.2 メートルの防潮堤が造られていたが、今回の大津波で、防潮堤そのものが流されてしまった。そこで、新たに高さ 12.2 メートルの防潮堤を構築している。今回、仙台空港から浜通りを北上してきたが、陸前高田市だけでなく、海岸に面するところでは防潮

堤の工事が行われている。

二つ目がこのベルトコンベアーを用いた市街地の造成である。山田教育長のお話では、市街地を取り囲んでいる標高 120 メートルの山を、40 メートルの高さまで切り崩して住宅地を造成する他、採取した土をかつての市街地に運び、市街地そのものの高さを 14 メートルにする計画であるということだ。ここでかさ上げされた造成地には、住宅ではなく商業施設を建設するという。120 メートルの山の２/３を切り崩すにあたって発生する大量の土砂を、ダンプカーで運ぶと 10 年かかるが、ベルトコンベアーだと 2 年ほどであるため、時間的にも経費的にもメリットがあるらしい。このような市街地の造成を行っているのは陸前高田市だけであり、ひとつの社会実験として世界の建設業界が注目しているそうである。

この復興事業について懸念される点が一つある。それは海への影響である。本調査をコーディネートしてくださっている及川氏は山を削ることで土砂が川に流れ込み、それが海を汚染して漁業にも影響があるとおっしゃっていたが、海への影響はそれだけではない。これまでは山の森林環境で降雨が浄化されるとともに、ミネラルなどの栄養が付加され、それが海に流れ込むことで植物プランクトンが増え、水産資源に良い影響を与えていたと思われる。それが、湾を囲む森林環境が大きく変化することで、海の環境に変化があるのではないかと心配している。

（３）熊野信仰の広がりについて

今回の調査において気づいたことは、東北地方における熊野信仰の広がりである。最初に訪れた名取市の熊野本宮社においては、本宮だけでなく高舘山に那智神社があり、新宮社として熊野神社があった。三日目に訪れた東岸寺では黒崎神社の懸仏を調査したが、懸仏は高舘山の那智神社にもあるらしい。また、午後には、中吉丸で漂流した水主清吉の母親が、清吉が亡くなったものと思って建立した石碑を訪問したが、石碑のある場所は大船渡市末崎の熊野神社であった。奈良に帰ってから、あらためて東北地方の地図を見ると、その他にも多くの熊野神社が存在する。

10 月に熊野三山を巡る研修を計画しているが、熊野信仰について事前に学習していきたいと感じた。

清吉の母が建立した
念仏百万遍の碑

（４）仮設住宅訪問から

米崎中学校仮設住宅集会所での聞き取り

二日目の午後に、米崎中学校仮設住宅集会所を訪問し、米崎中学校仮設住宅自治会長の金野氏をはじめ、多くの方々から大津波からどのように避難したか、避難所での生活、そして仮設住宅お住いになられてからのお話をうかがうことができた。

東日本大震災から 3 年半が経過し、奈良では仮設住宅のことがテレビで放映されることもなくなっているが、仮設住宅にお住いの方々にとっては、被災状況は続いている。津波によって、家や仕事、あるいは大切な人を失った喪失感は、忘れることはないだろう。しかし訪問させていただいた集会所には、

悲痛さや悲惨さを引きずることなく、多くのものを失いつつも、新たな人間関係を築き、力強く生きておられる姿に感動させられた。レベッカ・ソルニットの『災害ユートピア』に「不幸のどん底にありながら、人は困っている人に手を差し伸べる。人々は喜々として自分のやれることに精を出す。見ず知らずの人間に食事や寝場所を与える。知らぬ間に話し合いのフォーラムができる。」と記されているそのことが、この集会所にも出現していると感じた。金野自治会長が「ここにおられる方々は、すばらしい方々ばかりだ」「仮設住宅に来て、知り合いになれてうれしい」「みなさんに助けられてここまでやってこれた」と涙ながらに語られる合間に、「いやいや、会長さんのおかげだよ」「会長さんあっての我々だ」というような発言が飛び出し、互いに互いを尊敬し、大切にしているということをひしひしと感じさせられた。

昨今は無縁社会とも言われ、都会では隣の住人のこともわからないという状況であるが、仮設住宅には、不自由をみんなで一緒に乗り切ろう、楽しんでやろうという気概に満ち溢れていた。仮設住宅を卒業し、復興住宅に移り住んだ人たちも、ここを懐かしく帰って来られるという。人と人のつながりの大切さやどうすれば築くことができるのかなど、教えられることがたくさんあった。

（５）まとめ

３年前に東日本大震災復興支援の一つとしてはじめた文化遺産調査団であるが、生き方や学び方を支援されているのは私たちの方であるということを考えさせられる。文化遺産調査を通じて、地域の文化財と歴史の関わりが見えてくるに従い、教科書に記載されている中央政権側の歴史とはまた違った、地域から中央を見通した歴史の存在に気づかされることが多い。画一化された日本の歴史ではなく、地域の歴史文化を掘り起こし、尊重することは地域史という空間的な多様性の尊重でもあり、時間的な文化の多様性の尊重でもある。また常膳寺の薬師如来立像や今回はじめて訪れた念仏百万遍の碑など、地域の文化財からその時代の人たちの願いや希望を聴くこともできる。地域に生きた先人の声を聴きとり、自分たちが創っていく未来を考えることがＥＳＤの目標であろう。

また、東日本大震災・大津波を経験された方からの聞き取り調査からは、非常事態下で出現した善意や信頼を基盤とした人と人とのつながりは、今後追究すべき本当の幸せについて考える契機となった。誰もが幸せになりたいと思いつつ、市場経済に巻き込まれ、幸せを見失っているのが現在の日本社会ではないだろうか。被災され、無を共有された人たちの中に、私たちの社会が失ってしまった人と人のつながりを見い出すことができたように思う。

陸前高田市では昔から地震の後には津波がくると言われており、日ごろから地域ごとに避難訓練が行われてきた。特に今回の大震災前には、30 年以内に大きな地震が来ると言われていたので、早く的確な避難行動をとることができたという話もうかがった。奈良においても、30 年以内に南海地震、東南海地震が発生すると言われているのだが、各家庭、あるいは個人レベルでの意識や備えはどうであろうか。学校や職場で実施されている避難訓練は、広場などに避難することで終了であるが、本当はその後に学校などの施設において避難所生活が始まる。これからの防災教育においては、どこでどのような災害が発生しても確実に避難ができるような、避難行動の中核を押さえることと、一次避難後の避難所生活での自主的行動の体験までをプログラム化した教育実践が必要であると感じている。